

『李長吉周邊』

(三)

一九四一年二月十四日

晝間、胸の底の方に重つくるしいものがあつて、外を歩くのがつらかつたのに、零時が過ぎると、頭が冴えて来るのだ。階下で父の寝言が聞えた。どんな夢を見てねじつてあるのだろうか。僕が大きくなればなるほど遠ざかつてゆくのを父は知つてゐるのであらうか。自分の心を明るく保つ、おのれに望みを失はぬ、ただそれだけのことだに日々を費しながら、かうしてここにある僕はいつたい何なのかさへわからないのだ。言葉にたゞさける一人の人間が生涯を費くためになさればならぬことが、かうした孤独への努力だと言い聞かせてゐるもの、ともすれば心がくちける。僕はまだそんなに失望してゐない。悲しんでもいい。日の下でむすぼれた熟した心も、今かうしてをれば静かにさめてゐる。明日になつてもたぶん僕は生きてゐるだらう。明後日も。さうして幾年かの後にも、夜ふけに、まだ起きてゐて、悲しみもよろこびもない、といつて平らぎもない心に、その一日の出来事をしたためてゐるかもしない。もしその時、いまと同じ事しか書けないとしても、やつぱり、幾年か後に一つの立派な言葉を書くことを夢みながら、床に入るかもしれない。さうして一生が終る時にも、なほ何か望みを失はずにゐるだらうか。

僕が今日歩いた道はもう終つてしまつた。僕があんなに疲れて、しかも朝からうに見て通つ

た、あの新しくひらけた電車道は、僕の心にしかその痕跡をとどめてゐないのだ。明日は遠つた太陽の下に遠つた風景を描くのだ。そこへは僕はゆかぬだらう。僕がゆかなくてもちつともかはりはないのだ。

x

自分の都合のいい時にもち出す神、それは人の作つた神だ。本当の神ではない、人がそこから生れた神ではない。けれどもなぜ、人は都合のいい時に神をもち出すのだろうか。それは人間に願望があるからなのかもしれない。これはかうなればならない。これは神がさうなさつたのだと思へるのは、人間の怠惰な氣持から生れた考へもあらうけれど、何かしら望ましい事を神に見てゐるからかも知れぬ。人間はその様にして望ましいものを、願ひを、神に捧げていつた。どんなに小さなのでみでも、どんなに大きな願ひでも、それを無限に捧げていつても、富みもせず、貪しくもならず、捧げ物が無に融けてしまふ願が神なのかもしれない。もうこれ以上捧げることは出来ぬといふ事などないのだ。神の受難とは、人間の永遠の願ひをうけ入れてゆく運命といふのかもしれない。

二月十七日

言葉と精神の最短距離が詩だ。

二月二十一日

夢観にも一定の方向があるはずだ、その方向を見つける——。

影響とは、他の道にのりかえることではない。他の中にも己の道を見つけることだ。己の未来を見つけることだ。

一月廿四日

李長吉の集の四巻と集外詩一巻に收められたものの外に多くの作品のなかりしこと。もし刻中に棄てられたとしても、李長吉ほどの詩人の作品ならば、王參元など長吉の友人の蔵せるものがあつたはずである。それらについて何らの記述がないことは、王參元らが長吉の錦囊より詩句をうつして持つて歸つたといふことと合せて考へてみれば、失はれし作品は少なかつたと推測される。

* 李賀を憎む賀のいとこが李藩のもつていた賀の集を持ち出し剣に捨てたという話が〔唐〕張固『幽閑鼓吹』に見える。

實體とは状態を握つて立ち、一切の生滅を超脱してをるものだ。實體は固執する。 ショパンハーヴィル「光と根柢の原理」逐流の充足根據の原理 系譜Ⅱ

一月廿五日

ジエラシイが真相を悟る場合。

一月廿六日

ボエジーは、苦痛とか損傷とかを前提としてゐる。ミューーズは、その最初の歌を日没とか日出に歌はない。一日目に至つて初めて、人間は、苦痛にどもはれて再び現はれた太陽を、そして

又その再現を歌ふのだ。」・フォイエルバッハ『纏織断片』土方定一『詩に於ける矛盾の擴大』（文藝品和九月八月號）所引。

清絲沈水如雲影 李長吉 染絲上春機
勞勞一寸心 燈火照薰田 離歸夢

二月廿七日

現世への倒錯的愛執。

×

物を見る場合に、感覚が理解の第三作用の材料となる工合を堅く把住し考慮の中に取入れるの
が画家の技術で、普通の人は材料として使ふだけで直ぐ捨ててしまひ、それを記憶に取り入れよ
うとせぬ。充足根據の原理二十一節

三月一日

悲しみも、憎みも、のスヒも、それ自らは正しい。悲しみを悲しみ、憎みを憎み、呪ひを呪へ。
しかし、詩を、悲しみをばくかす手段には用ゐるな。詩は自ら盛らるべき以外を盛られる一と
を肯はぬ。肯ふことによつて、悲しみを、憎みを、呪ひを、讀すことを恐れるからだ。

三月二日

人生に於ては、生の歡喜と活動に於ける擴張の時代と、自己自身への退歩の時代とが互に交差
する。ヘルダーリン

三月三日

李長吉の詩の根據は、彼の現世への限りない愛が、一とじへ裏切られたところにある。

昭陽の恩を矜持して肯て南面を見ない。寧ろ清酒もて黄泉の客とならんことを試するのである。
本集 深嘗飲酒歌
「(二)に彼の怪奇の詩が始る。生の中に混じた死への凝視、現世への倒錯的愛執が始る。妻身畫團團 君魂夜寂寂 は李長吉が彼の詩に対する哀傷の竟と見てもさしつかへない。

三月四日

李長吉の眼に過去にそそがれる。現在の不満を過去に忘れようとしたのだ。未来は彼の前に開されてゐる。彼には未来は輝かしいものではなかつた。そこには彼を襲はんとして眞暗な口を聞いてゐる死があらばかりだつた。

×

いづれの詩にも——また同様にいづれの器樂曲にも——感情に於ける個人の内性に溯源せられた一つの體験しつくしただ的過程がその根柢をなしてゐる。かかる内的状態の経過は、外部から規定せられた個々の體驗に依つて喚起せられたものであらうと、或は外界と無關係に内部より生じ来る情緒に依つて喚起せられたものであらうと、或はまた歴史的なるものにせよ、哲學的なるものにせよ、一つの理念群によつて喚起せられたものであらうと、常にかかる感情の流れは詩及び詩のうちに表現せられる内實の出發點をなす。
デイル・タ 時と體驗 ヘンデル・リン

自分の作品の△底にある主題などでも言ふべきものがやつと解つて來た。それは正に、現實の世界と、それから我々が作り上げる表現との間にある對立であり、またそれであるだらう。物象の世界が我々に迫つて來る仕方、それから我々が外界に對して特殊な解釋を迫る仕方、これが人

生のドラマなのだ。

シード 賀金つくり エドワードの日記

参×二
日

三月五日

閉門感秋風 幽姿任翠潤 大野生素空 天地曠肅殺 露光泣殘愁 嘘誓連夜發 房寒寸輝薄
迎風絢紗折 披書古芸韻 恨鳴華容歎 百日不相知 花光變涼節 师兄誰念處 残輪與通達 清
袍暖白馬 草簡奏東闕 夢中相聚笑 覺見半牀月 長恩劇循環 亂憂抵童葛 ま長ま 秋涼舞

三月六日

その時 あなたは 時間を超えて

祈りであった

空虚な言葉が渦み流れてゐるなかで あなたは
深淵だつた

あなたの眼は大きくみひらかれてゐたが
何ものはいつて行くことも許さない最しい色が
不氣味な静けさを透へてゐた

あなたの前ではおのれの小賢しさがみるみる色あせ
日光に照らし出された散壘のやうに
浮動するばかり

x

船、特に動いてゐる船を眺めて感じられるあの神秘的なそして無限の忧愁感は、第一に錯覚や調和と同じ程度に人間精神の本源的欲求であるところの、正確さと均衡から生ずるものであり、第二に此の對象の實在要素が、空間に描く總ての想像的曲線と形態とが發生したり連續的に倍加したりすることに依て生ずるもの様に私には思はれる。ポートレート 覚言²²

何故に、海の眺めは、かくも無限に、永遠に快適であるか。その故に、海が宏大さと同時に、運動の觀念を與へるからである。僅か六哩か七哩の齊さが人間に無限に見える。一二に無限の縮圖があるのだ。だが然しそれが總體の無限の觀念を暗示するに足れば、それだつていい譯である。十二三哩の動搖する水が、浮沈常ならぬ人間に美の最高の概念を與へるに足るのだ。同76

三月七日

己は己の存在を死んで始めて知るのであらう。譬へば夢を見る人が、夢の感じの溢れた爲に、目の覺めるのと同じ様に、此生活の夢の感じの力で、己は死に目覺めるのか。ホフマンショーテル 訳 聞譯
ヨカステ 風の前の焰のやうに、あなたが払はれてお出でなさるのは、近寄る此身の「死」どもでは。ホフマンショーテル 訳 聞譯
長安夜半秋 風前袋人老きみき意想 アンチオペいや、御身の「生」
ちや。雪へば大浪の飛沫ひよのやうに、際限も無う吹いて来て、老い曝さらばうた骨に敵へる。詩

x

人間の幸福を齎す事業が、罪業の子たるオイディップスによつてなしとげられる意味。

三月八日

寧長吉よ、闇房の詩があるからといつて、お前を眞貞でないという者がゐるのだ。お前が眞貞であらうがなからうが、それはどうでもよいことだ。ただ、結合がなければ結合か解せないと頑に言ひはる者共にいささか腹を立てたのだ。そんなに想像力の貧弱な奴に、お前がわかるのどううか。

三月九日

又獄卒地獄の人を孰らへ來たりて、刀葉林の中に置きける。此の林の梢を遙に見上ぐれば容頬美麗にして、綺ひ飾りたる女房あり。げにも古へ寢しかりし人なり。嬉しやとて其儘木に亘れば、枝も木の葉も皆剣にて、身を切り割き骨を透し筋を断つ。ニコニモ恐しきと思ひながらも葉に引かれて猶寒しく、剣を凌ぎて上にのぼり、彼の女房を見れば、又地にありて懐かしげに媚を含める目元にて木の上なる罪人を看て去ひけるは、我れ汝を思ひし業により此の處に來りたり。汝何とて我に近づかざるや。いかに契を二めざるやと、木の下に歸めき立てり。男強々愛念情にして又木の上より下るる時、剣の木の葉は上に向ひて、又一身を遍く切り破り突き貫かれて、既に地上に到れば、かの女房また梢にあり。罪煩れ悶えてまた木に登る。是の如くにすること無量百千億城なり。往生要集 真合地獄の事

石を起こし見よ、汝、眞處に我を看ろべし。木を割りて見よ、我、眞處に在リ。新約外典 ロギアオフ
シリカス断片

三月十日

苑には木々をわたる風

西の空に
奇い

くるめく光

日にそむいて歩む

頬のつれなさ、唇のいちわるさ、髪にもつれるおもしり

道は山かげに入る 沈みる北風

日は沈む

徑は夜に通ふ 命はむごい言葉に

指にそよぐ死

肋骨の間に生ひ茂つた陰花植物が、風もないのにざわめいて、庵をねむらせない。月がそこに来て、青い灯をとぼす。

三月十一日

じつとしてぞれめ。何か一つ、心にかなふ詩を。詩でなくともいい。自らに許せるものを作らねば死ぬめ。だのにどうしてかうも早くすぎてくれのか。もう幾年生きてみられるのか。まだ一人であろうときはいい。人々とみて、つまらぬ話などされるといらいらする。おれは長生きさうにない。何一つおのれに許せるものも成してゐなくて、安らかに死わようか。

晝間苦しみを耐へてゐた空が、人達の寝しづまつた午夜すぎて荒れ始めた。屋根裏部屋にまだ起きてゐる俺には、雨が屋根うつ心を想像できる様に思へるのだ。海の様に鳴るお前のが。

三月十三日

もし李長吉が絶えず死の影に怯かされなかつたら、どうしてあのやうにせつない生命への愛執が生れたらう。長吉に限らない。薄命の詩人劉廷芝だつてさうではないか。年年歳歳花相似、歳歳年人不同。死と生との奇異な混淆、漫蕩たる純粹詩。

x

煩し侍りけるがいとどよわくなりにけるにいかなる形見にか有けむ山吹なるきめきぬきて女につかはし侍りける

梶子の園にや我身入りにけむ思ふ事をもいへでやみぬる

三月十四日

藤原道臣朝臣

千載集 哀傷

これの世の暗き機巧はひとすぢに關ふ兵に言はれざりけむ 濁流だ湯流だと叫び流れゆく末に
泥土か夜明か知らぬ わが上を夜々ながれゆく濁水のおそらくは海にとどく日もなき

唐藤史魚致

三月十五日

現實と生きた力の中よりも、寧ろ想像と仄暗い欲念の中に再び一つの世界を發見してゐる
エルザルの世界

我々が立つてゐる處は困窮の中だ。檢査の中だ。我々の靈は涸れゆく深じに渴ゑてゐる。同
并が哈爾賓醫大に合格した。

三月廿四日

ディレクタントだけが藝術を享樂することができる。藝術家にとては業力のだ、刀葉林地獄なのだ。

否定、否定と書きながら小綺麗なタブローを仕上げてゐる。
なやましいやうな倦怠をうますたけます描きつづける畫家、なんといふ勤勉ヤ！

三月廿五日

娘よ、我々は、短見者流に、我々自身の小さな個人的幸福だと思つてゐることの爲に生れてゐるのではありません。我々はばらばらの、獨立した、それ自身存在してゐる個體ではなくて、或る連鎖の一節なのです。又我々は今あるが如きものとして、我々に先行し、我々の爲に道を指示した一群の人々なしに考へられないでせう。ヨハン・ダッデンブローカよりトオニ・グッテンブローカへ

親や目上のもの、先生や先輩、それから政治家などが、子や弟子や民衆を縛るために最も合理的なお説教がこれだ。「或る連鎖の一節なのです」有難いしあはせに、確かにそれには違ひない。だからといって、なぜその一節が、その前の二節と同じでなくてはならぬのだ。こんな理窟にかしこまつてしまふ様な善良な息子たち娘たち并びに民衆たちに光榮あれ。

「理解のある」親ほどあつかひにくいものはない。二重に漆をめぐらした城だ。息子の心臓から放つた矢も、たいてい一の漆の水に空しく落ちてしまふ。本丸は難攻不落だ。

トオニの心がたちまちモルテンから移つてしまふ鍵も連鎖の中にあつた。女、がつしりした家

具たちの間に長い糸圖を載いて花の様に育つた女にとつて、民主主義も理想も眞理も何であらう。彼女を本當の女にするには、家具や糸圖や両親たちから引き離さないでは駄目だ。しかし彼女はそれらのものなしには結局をれないのだ。それを見抜いてゐるヨハン。俗物、だが、俗物だけが世に榮えることを許されてゐる。今の世を領するものは俗物であり、次の世を領するものも俗物だ。藝術も、眞理も、それらが生む純心も、この世においては没落の運命にある。美しきものよ、岷びよ。

三月廿一日

都合の悪いことは茶番化させ、都合のよいことはおのれの悲劇にとつておく。こんな態度が中途半端な日々を生む。見ることは爲すことを伴はなければ完全にならない。一つのものを追求してその本質をつかむまで他のものに移つてはならないということを知つてゐる。だのに何故どこまでも追求しようとしてないのか。おのれに課した問題の一つでも解決したか。どこへ行つてもまづ迷路を作らうとするお前のまへには迷路だけしかないようになつてしまふだらう。迷路をつきくづし、おのれを、おのれといふ袋小路まで追いつめるのだ。窮したおのれは、おのれを突き破るだらう。この突進が詩ではないか。

人生の航路に現れた冰山は、ぶつかるよりはかに避け様がない。迂回は無限の冰山だ。解決は自ら見出すほかないであらう。智識は大して役には立たないだらう。決断と訓練だ。集中と構成だ。

四月一日

宗教と藝術の矛盾については僕も平生考へてみるとありました。昨日のあなたの話がその問題に觸れておられたので、もう一度、考へてみました。

神のみを愛すべき人間が詩歌に心を奪はれてはならない、とM氏が言はれた。牧師としてあの意見は當然です。しかし、神の恩寵に浴した者、神の恩寵を願ふものが、神の讃美歌をうたはないでせうか。教会ではオルガンは響かないでせうか。なぜバイブルに詩篇があるのでせうか。そして佛教の經典はなぜ萬文で書かれわけならなかつたのでせうか。

だが我々の歌け神をたたへてはゐない、我々は、我々の山みや喜びを、花々、鳥を、山を、鐵橋を歌ふが、神の名を唱へはしない。といふ問が出るかもしません。それならなぜ、ソロモンの雅歌はエチオピアの女を、その鶴のやうな眼を、ギレアデの山の腰に臥す山羊の群に似た髪の毛を、ぐれなみのいとすぢのやうな聲を、祐智に似た頬を、ダビデの髪のやうなうなじを、コペル・ナルタ・ナフラン、林檎のやうにいどしい女の姿を、描いたのでせうか。舊約の世界は、新約の世界と違ふのでせうか。ではなぜ、神の子イエスの奇蹟を、造形の神のわざによづべて描き語らねばならなかつたのでせうか。

尺八といふ樂器は、釋尊の説教のあまりの單々に、せめてその聲音なりとも偲びたいと思つた僧が考へ出したものだ、との傳説があります。われわれは神のつぶられた一の美しい世界を、せめてなぞつて見たいと思はないでせうか。

基督教に於ては、神はただ一にしてすべてのものは神に造られ神に治めらるゝと言つてゐるやうです。輕々に言はれる意味での汎神論ではありませんが、佛教にも、一木一草に神を觀る、といふ考へはあるやうです。一木一草も神のあらはれだとすれば、草におく露をうたふ我々の歌は神のはめ歌ではないでせうか。

佛教では煩惱即菩提といひます。我々のなやみから遠い、まつたく我々の苦しみに縁のないさとりとか菩提とかがあるでせうか。我々の祖先はなぜあの化物のやうな阿修羅を刻んで佛殿に安置したのでせうか。この間、あの像は少女だといひました。悩みに満ちた成長期の少女の像なのです。阿修羅を刻む時にこの作者が、わけのわからぬ苦しみに生きてゐる少女の相をとりあげた意味について、小さな論文めいたものを書いたことがあります。そこで僕の考へたことのおほよそは、併といふものは決してわれわれ惡に満ちた人間を離れたものでない。われわれのあやまちがそのまま併の境涯ではないかといふやうなことを云ひたかつたのです。

われわれが私一個の苦しみを歌ふそのことが神のはめ歌になるのではないでせうか。意志怯弱なわれわれが、はかない歌によつて今日一日の過ちや懊みや怒りや妬みを記していかなかつたら何によつておのれの罪を認めることが出来るのでせうか。詩歌は單なる感情の表出ないしは描寫ではありません。體験なのです。自己認識なのです。詩歌は娛樂や詠嘆ではありません。麻雀やトランプ、衣裳や化粧具と一緒に考へえないのは明らかです。そのトランプも化粧具も神の造つた人間の考へ出したことではありますか。

それらを退けることは、しかし正しいことでせう。我々はあまりにも自らを見つめるに暇がない、自らを見つめるより急な務けないはづですから。そして詩歌は我々が自らを見つめる一つの詩人にとつてはたぶん唯一の一一道なのです。

人生は一様ではありません。神は一なりといへ、神のあらはれは無限ではないでせうか。その無限のあらはれに唯一の神を見つめ、常に神の聲を聞いてゐる、選ばれた一群の人々があます。だがわれわれは、パリサイの徒。=異端左道の輩、です。神のあらはれの片端を、あるひは詩歌により、あるひは繪畫により、あるひは音樂によつて把まうとするのです。

微かなものではあつても、われわれに與へられた一管の笛を吹き、ならして、一塊の石に現れた神、一本の革に現れた神、一つの悲しみに現れた神をたたへることが、神をないがしろにすることでせうか。雲雀のくちばしを縛つて神の教へを説ききかせることが、神の心にかなつたわざでせうか。アッシジのフランシス上人は雀たちと話をしたといふことです。雀たちはどんな言葉で人と話をしたのでせうか。われわれは一羽の雀ではないでせうか。釋尊がなくなつたとき、空の鳥、野の獸、水の魚、地の蟲たちが、みな寄つて来て泣いたといひます。かれらは何と云つて泣いたのでせうか。われわれは空の鳥、野の獸、水の魚、地の蟲ではないでせうか。

われわれは、泣き、悲しみ、喜び、踊り、そして歌をうたひます。それが地獄の蟲だとしても仕方がありません。陥ちた地獄の底から、神の行め歌をせめて天上にむかつて歌ひつけませう。ただ一人救はれて天上に住むより、人々と共に地獄に堕ちて、そこで互いに慰さめ合ひながら歌

ひづける方がどれだけいいかしらません。

あなたは詩歌と信仰についての手紙を下さるはずでした。だから今この手紙をやしあげても遅し出がましい」にはならなかつたであらうかと想ひます。靈廟の御座に甘いといふことです。今まで云つて來た「も・かにがわだしの口ばかりで誇張しようとすねであるかもしません。あなたの信仰がそれを判断なさるでせう。

(以下次號)

△雜記・二△・四 牙

春月夜啼鶴 韶華御花 雪生宋絃暗 石断紫錢斜 玉燒靈殼露 銀燈薰鶯紵 論王熙近信
泉上有芹牙 李賀の「過華清宮」20654(校本010)である。第八句の「芹牙」を他本はみな「芹芽」とする。陳繹(陳弘治『李長吉詩校釋』)は北宋本を校勘に使っているのに、このことと校字の条にあげていない。もっとも陳氏はこれだけではなく、王注があげている文字の誤写も無視することがある。芹芽の方がおだやかで通りはよいだろう。けれども読人の表現け通りのいい方にはかり勧くことに限らない。李賀の場合はどうだらうか。「夢遊五首」の第一首20752(校本103)の第十四句は「乘牙今尚小」で、桑の芽は今はまだ小さい、といへば、この詩では讀本みな「牙」である。「芽」とするものをわたしは知らぬ。「新羅歌」20860(校本216)の第三句は「陰枝參牙卷綠芽」で、ひがげの枝の拳のような芽がはなだ色の毛をまぶして、といへばこの意。諸本みな「牙」と

するのに王注が「芽」とし、鈴木注は画字をあげた上で芽がよいとし、葉注、斎藤注、陳叙はみなこれを襲う。「經沙苑」20362(欽本218)の第二句は「宮牙闇小蕪」で、この牙を芽とする本はないようである。もとも姚注は宮牙を牙門とし、王注は牙は衙に通じ宮牙は宮衛だといい、以後の注はこれにならうものが多い。しかしこの牙も曾注にいうように芽に通ずるものと見るのがよい。宮庭の草の芽が小さなかね色をひらきかけている、という意であろう。わたしは拙稿「負薪」にこの詩を引いたとき王注に従つて「役所にはあかね萌えたり」と訳したけれども、落着かなかつたが、李神通の傳をひらくかえしているうちにふと思いついた。沙苑は諸注がいうように、唐の高祖が太原で義軍を起し、南下して困難な戦いのうち黄河をわたり、長安に入る前に宿つた場所である。高祖の渡河をまことに迎えたのは李神通であり、その渡河を可能にする条件をあらかじめ長安附近で準備したのは神通たちであった。高祖が喜んで神通に光祿大夫の職を与えたのはこの沙苑においてではなかつたか。この詩の第三句「無人柳自春」の人は、その時に見えぬ人かけも指すだろうが、よりいっそう、かつてここで榮譽に輝いた賀の祖神通を指すに違いない。それならば、この詩の視野には、光榮を思いおこさせるものまったく不任である。荒漠のみが切りとられていてはすである。牙門や宮衛は詩人の意識から排除されていたであろう。では宮牙とはなにか。榮光をになうべき草、諸孫(皇孫の子孫)である翼がみずからをたとえて宮草といってよいであろう。現實の宮草は春のめぐみをつけてあかねをひらこうとしているのに、それにたどえるべきおのれは、きざしてくる光も見えず、牙のようにかたく尖って、この荒